

# 麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 動物応用科学科

職階 准教授

氏名 戸張靖子

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

# 1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年4月

「人を育てる」という仕事に責任と誇りを持ち、社会人、職業人として必要な知識や技術の習得を目指して麻布大学に入学された学生さんがそのモチベーションを落とさないような専門基礎的な教育科目の授業とそれに関連した実習を行う。また講義・実習内では学生さんが自分の成長を実感できるような働きかけを行う。具体的には、学部1年生に対しては、教養を深め、学部教育の基礎となる学力を授け、2年次から3年次にかけては専門教育を受けるための基礎となる専門基礎の科目の知識を授ける。4年次の卒業研究においては、問題解決能力も育めるよう指導を行っている。大学院生には、動物応用科学を基盤として、地球上のあらゆる生命強勢と保険の進展に貢献する人材育てることを目標とし、学生さんの主体的な学修と研究活動をサポートする。また出る杭・ジェネプロにも参画、やる気のある1,2年生や高校生の学習・研究意欲をより高める活動を行う。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
サイエンスリテラシーⅠ	動物応用科学科	必修	1	136
サイエンスリテラシーⅡ	動物応用科学科	必修	1	135
スタディ・スキルズ	動物応用科学科	必修	1	2
動物応用科学概論	動物応用科学科	必修	1	136
動物応用科学実習	動物応用科学科	必修	1	136
動物生命科学実習	動物応用科学科	必修	1	136
動物生化学	動物応用科学科	必修	2	146
動物生化学実習	動物応用科学科	必修	2	148
遺伝生命科学実習	動物応用科学科	選択	3	50
バイオインフォマティクス演習	動物応用科学科	選択	3	31
専門ゼミ	動物応用科学科	必修	3	2
科学の伝達	動物応用科学科	選択	4	5
卒業論文	動物応用科学科	必修	4	5
愛玩動物学Ⅱ	獣医保健看護学科	必修	1	81
動物繁殖学	獣医保健看護学科	必修	2	74
動物生命科学特別演習Ⅰ-Ⅰ	動物応用科学専攻(博士前期課程)	必修	1	3
動物生命科学特別演習Ⅰ-Ⅱ	動物応用科学専攻(博士前期課程)	必修	2	5
動物生命科学特別研究Ⅰ-Ⅰ	動物応用科学専攻(博士前期課程)	必修	1	3
動物生命科学特別研究Ⅰ-Ⅱ	動物応用科学専攻(博士前期課程)	必修	2	5
動物生理遺伝学特論	動物応用科学専攻(博士前期課程)	選択	2	5
動物資源制御学特論	動物応用科学専攻(博士前期課程)	選択	2	5
動物資源工学特論	動物応用科学専攻(博士前期課程)	選択	2	5
動物ゲノム解析学特論	動物応用科学専攻(博士前期課程)	選択	2	5

## 2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年4月

1. 麻布大学の学生さんには、インプットとアウトプットの多い、自分で考え判断できる人材となってほしい
2. 麻布大学での学問を通して自身のブランディングをしてほしい

動物生化学の講義では、毎回講義の内容で課題を出し、その回答を次の講義前までに麻布大学のラーニングシステムである学理に提出してもらっている。学生が提出した課題レポートをもとに私は解答案を作成し次回の授業の冒頭で課題の解説を行う。学生は自分が提出した課題レポートと解説を見比べることで、自身の知識の定着を確認することができる。これらは、学生が目的意識をもって学ぶ態度を身に着ける効果があると信じている。

また、動物生化学と動物生化学実習の間につながりをもたせた内容設定を行っている。これは座学と実習の両面から学ぶことで、知識の定着を促すものである。また点として学ぶのではなく線や面で学ぶことを知るきっかけになることを意図している。

基礎ゼミや動物生化学実習などで提出するレポートについて、レポートはどのような構成でかかれるものなのか最初書き方の見本を提示しやテンプレート作成する課題を出して、早い段階でレポートの書き方を身に付けてもらっている。発信力（アウトプット）の基礎である文章力を身に付けてもらうのが狙いである。レポート作成時の参考文献については、論文もしくは書籍の引用のみに限定しており、それは良質なインプットの機会を増やす目的で行っている。

## 3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年4月

学生の発信力を高めるという目的で、実習やゼミ・卒業研究指導の過程においては学生の発表する機会をつくる、または多く設定するという方針をとっている。ただし、動物応用科学科の学生は全体的に口頭によるプレゼンテーション力がとても高いが、文章力にはばらつきがあるように感じている。よって研究室に配属された学生に対しては、研究室ミーティングにおける口頭のみでの週間報告、文章による月間報告、プレゼンテーションソフトを用いた2カ月間の研究進捗報告を課して、個人の発信能力を把握するように努めている。

またゼミや研究室のプログレスレポートでは、教員を含めて一人一回必ず質問制度をつくることで、質問をすることに対する心理的なハードルを下げる効果を狙っている。さらに、研究室内の発表会だけではなく、古泉賞発表会（学科）、研究三昧（大学）、動物学会関東支部会などで発表することを促しており、学部生ながら、鳥類内分泌研究会動物学会関東支部会で発表する学生も輩出している。

インプットに関しては、研究室活動で毎年2冊程度教科書や学術書を輪読することにしていく。（この活動で、分厚い本を読み切ったという達成感が学生の自信につながると聞いた。）また研究室活動にビジネスチャット(slack や stock)を取り入れているが、そこに学習に関わる論文、書籍、ネット記事等リンクを貼っておくと、学生が高確率でアクセスしてくれるので、推薦図書の間として利用している。

学生の教員に向かったの自主的なアウトプットは、こちらがフィードバックを適切に返さないと持続しないことが多いので、学生が発信してきたものについて何らかのフィードバックを可能な限り早く行うようにしている。

### (1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

- サイエンスリテラシーにおける①ブレインストーミングによるアイデア出し → ②企画書作成・プレゼンテーション → ③プロジェクトとしての企画書の作成 → ④企画書を実現するための綿密な行動計画 → ⑤行動計画をタスク（仕事）表に仕上げる → ⑥タスクの分担・プロジェクト内の役割分担 → ⑦タスクの実行と管理 → ⑧最終成果報告 → ⑨振り返り
- 動物生化学実習における仮説を立てる→仮説をグループディスカッション→仮説のプレゼンテーション→実験→仮説と実験結果の照らし合わせ→レポートにおける実習の整理と考察

### (2) ICTの教育活用

有

- 授業資料を1週間前までにAzamoodleにアップロードし、講義前から学生に閲覧できるようにしている。
- MEETで行った授業を録画しそれを学理にアップロードすることで、欠席した学生や授業内容を復習したい学生がオンデマンドで利用できるようにした。
- ビジネスチャット slack や stock を使って、学生相互で進捗状況を把握することで学生教員感だけではなく、同学年間、先輩後輩間でのコミュニケーションが増加した。

## 4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

### (1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

A

講義においても毎回課題を出し、それを次の回答を次の講義で解説することで、学生自身が講義を理解できたのかどうか判断できるようなシステムを構築している。実習では、単なる体験ではなく学生のキャリアや研究室活動につながる内容を取り入れている。

**(2) 学生の理解度の把握**

**A**

動物生化学やバイオインフォマティクスでは毎回提出してもらう課題レポートで理解度を把握した。また提出物を見ながら、どこで学生がつまずいているのかを理解し、解答案をより詳しくしたり、理解が悪いところは解答案をシンプルにした。

**(3) 学生の自学自習を促す工夫**

**B**

課題のために参考にした図書は参考文献リストをつくってもらい、教員はその点についてフィードバックを返すようにしている。友達がどんな参考文献を選んだのかという情報は学生にとって興味の対象になるようである。

**(4) 学生とのコミュニケーション**

**A**

講義後の対面、メール等で随時受け付けている。学生から受けた質問は、可能な限りその次の講義実習で、全員へフィードバックしている。

**(5) 双方向授業への工夫**

**A**

講義においては、課題を通した双方向授業を組み立てている。実習については、実習班2班あたり1名TAを配置し、学生が質問しやすい環境を整えている。また実習中にグループディスカッション時間を設定し、班で話し合った内容を発表してもらう時間を設けている。

**(6) 国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）**

該当なし

## 5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

### (1) 授業評価アンケート結果の授業への反映

動物生化学の講義において毎回課題があることと、その課題の解説があること、その内容が丁寧であることを学生さんから評価いただいたので本年もその点を充実させた。動物生化学実習については、実習内容の豊富さから貴重な経験ができたと評価を得た。一方、定期テスト前のレポート提出期限が厳しいとの声があったので、その点については配慮と事前周知を徹底させた。

### (2) (1)の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

動物生化学のついてはA評価の学生が増え、BやC評価の学生の割合が微減した。一方で、不登校の学生や追再試を欠席する学生の割合が増えD判定の学生の割合も増えた。

### (3) (2)を踏まえた次年度の取組

動物生化学の担当から外れる。また、動物生化学実習は廃止になる。

## 6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

### (1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

- ・バイオインフォマティクス演習のアップデートとAlpha Foldの導入とDeep TMHMMの導入・愛玩鳥に関する講義のブランド化（麻布大学でしか学べない講義内容）
- ・2026年に発足する個体間シグナル解析演習の準備

## (2) (1) の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

・ バイオインフォマティクス演習のアップデートとAlpha Foldの導入とDeep TMHMMの導入→2024年のノーベル化学賞の話題を取り入れたことにより、この回の演習課題の提出率と正答率が高かった。

・ 獣医保健看護学科で行った愛玩鳥の講義の後は数名の学生が熱心な質問を持ってきてくれた。

## 7. 指導力向上のための取組 (FD研修参加等)

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年4月

FD 研究会に定期的に参加した。

## 8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年4月

22年度4月に准教授への昇進し、24年度は初の修士号取得者を輩出できそうである。来年度は修士課程2年生2名、修士1年生は3名となり研究面にとって大きな飛躍の年となると確信している。4年度はその大学院生と一緒に教育研究することにより、麻布大学でしかできない研究を推進する。その結果、大学院生が国際学会や国際雑誌での発表などで学生のオリジナリティをアウトプットすることにつながると考える。「ウズラを通して、生態、形態、動物福祉、文化、ヒトとの関係、家禽化（実験動物化、産業動物化を含む）を学ぶ」という内容を生物学実験で展開している。このような内容は他の動物科学系の大学でも行われない内容で、レポートの中のフィードバックでも好意的であった。今後も麻布大学でしか学べないオリジナルな授業を展開したい。

## 9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年4月

2023年度、2024年度授業評価